

「生きている人」が  
なくては  
ならないこと  
熊谷 直



一番ショックだったのは、初日の高田さんの話の中の「生きている人」に頼んだからいけなかったんだ、生き残った人がいなくてはいけなかったんだ」との言葉でした。80歳を超えたお年寄りに自分を含めた、生きている世代の人間はいつか何をしているのだろうかという強い憤りを感じました。実際に遺体収容する以外にもできる事、なくてはならない事があると思ふので、少しずつでも実践してゆきたいと思ひました。

実際の収容は、体力的にハードではありましたが、それ以上に街の中にある事がショックでした。コンビニのすぐ裏手に60年放置されたままになっている事、そのことに強い憤りを感じました。また、平和公園にあった今年収容した遺体の入った白い袋の山にも驚きました。60年経ってまだこの状態だが、更に60年経っても解決していないのではと不安にもなりました。沖繩出身の方でもやはり同族の墓に入りたいと思っているはず、他の地方出身の方ならなお更故郷に帰りたいと思っているはず。遺体は自分では歩いて帰る事が出来ないのだから「生きている人」が早く連れ帰ってやらなくてはと強く

く思いました。  
貴重な体験  
成澤 健次



2月12日朝、遺体収容班と壕・ガマ探査班に別れてホテルを出発しました。私は探査班の方でした。探査する現地に着いて地下に電気を通す用意をしていると、遺体収容班から連絡が有り、その内容は「子供らしき骨が見つかった」。その内容を聞いた時は、そんな簡単に見つかるものなのか、日本政府は今までいったい何をしているのだらうと感じました。今現在の沖繩の状態をもっといろんな人にも知ってもらわなければならないと思ひました。

今回のツアーで体験した貴重な体験を職場の人間に伝えていきたいと思ひます。全国へ  
日高チヨノ  
親が、我が子が、何も悪いことをしていないのに殺されるなんて、私はちがえられませんか。今、他国では戦争が起きています。いえ、他国と言えなくなってきました。私達大人は次代を担う子供達に、命の大切さを胸を張って伝えるのではありませんか。「命どう宝(ヌッチドウタカラ)」と声を大にして伝えるので

今私に出来ることは、  
今回の体験を家族や仲間  
に伝えることです。一人  
の声は小さいけれど、言  
い続けること、大勢に  
なれば大きい声になりま  
す。

沖繩の方々の戦争体験を生の声で聞き、60年たった今も鮮明に脳裏に焼き付いていること。忘れようとしても忘れられない恐ろしい体験だと思ひます。大変だと思ひますが、これからも伝えていって下さい。私も頑張ります。

命の尊さを  
語り継ぐ  
金子 邦彦



戦没者遺体収容に参加をさせて頂き、人生で貴重な体験となりました。私は、電気探査で壕位置のデータを収集しましたが、壕を探すというより、戦争により光を失われた人々、埋もれた命を探す事に変わってまいりました。

この貴重な体験を、自分の心の中だけに留めておらずに、戦争の無意味さ、命の尊さを語りつなげなければなりません。私達若者が戦争反対、平和を叫び続けなければならぬと思ひます。

平和を祈る  
寺田 証明



青い海、青い空そして観光客で賑やかな街、そんなイメージで初めて沖繩の地にやってきました。テレビ、本等で知る沖繩の地は私にとっては他人事のような気がして。今回遺体調査、収容に参加して、今までは、戦後に生まれた私は平和というものに当然の事だと思ひていました。しかし、平和は私達の手で作っていかねばならないと痛感し、情けない気持ちでいっぱいになりました。約23万人の方々がこの地で命を落とされ、又残された人々の悲しみは私の想像を遥かに超える事だと思ひます。

私達の組合活動の中で「平和なくしては労働運動もない」と記されています。この沖繩の体験を生かし、平和を呼びかけこの手で作っていくことと思ひます。戦没者から  
何を学ぶ  
田中 大作  
今回初めて参加しましたが、遺体収容をするにあたって、何をすべきなのか、何を他の者に伝えればいいのか色々考えて参加しました。戦後60年という歳月がたち、今までそのままだ

放置された戦没者の遺体  
を実際掘り出し、手に  
とつてみて、今まで私が  
学んできた戦争の事を思  
い出したら涙が出てきま  
した。戦争はすべての人  
が不幸になります。この  
体験を自分の職場だけに  
留まらず、友人達にも伝  
え、二度と起きないこと  
を祈りながら、日々の生  
活に生かしていこうと思  
いました。

自分にとって初めての体験であり、不安がいっぱいであったが、実際に現場の壕に行ってみると街の中のアパートや店があるような場所にあることに驚いてしまった。このような所に、まだ手つかずの壕があることそしてその中にはまだ数多く亡くなられた方々の遺体や遺品が残っていると、今までの無感情が湧いてきて、ただただ悲しく整理のつかない気持ちでいます。身をもって、戦争の悲惨さと平和の喜びを訴えかけて下さる御遺体を放置したままにしていくという現実、戦争が何であるかをきちんと学ぶことなく、平和であることに尊さをないがしろにして、戦後60年にして、また戦争へ加担しようとしている日本の有様を象徴している様に感じました。私は戦争を体験していませんが、この二日間にはまさに「戦後を体験」したと思ひます。あと1週間、体の耳も心の耳も大きく開いて沢山のことを感じ、神戸へ持ち帰りたいと思ひます。貴重な機会をありがとうございます。

私の戦後体験  
正木麻衣子



初日からの経験全てに、今までの無感情が湧いてきて、ただただ悲しく整理のつかない気持ちでいます。身をもって、戦争の悲惨さと平和の喜びを訴えかけて下さる御遺体を放置したままにしていくという現実、戦争が何であるかをきちんと学ぶことなく、平和であることに尊さをないがしろにして、戦後60年にして、また戦争へ加担しようとしている日本の有様を象徴している様に感じました。私は戦争を体験していませんが、この二日間にはまさに「戦後を体験」したと思ひます。あと1週間、体の耳も心の耳も大きく開いて沢山のことを感じ、神戸へ持ち帰りたいと思ひます。貴重な機会をありがとうございます。

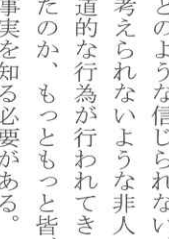
尊い命の為に  
村井健太郎



世代の人間がこのような現実をもつと知るべきであると思ふ。人間が人間でなくなるという悲惨で過酷な戦争が、60年前まではこの地で実際にあったという事、そこで一体どのような信じられない考えられないような非人道的な行為が行われてきたのか、もつともつと皆事実を知る必要がある。事実を知れば、これからどのようにしなければいけないか、自ずと分かってくるはずである。この体験は辛いものであったが、自分にとって非常に貴重な経験であった。

平和祈念資料館に書いてあった「戦争を起すのは確かに人間です。しかしそれ以上に戦争を許さない努力の出来るのも私達人間ではないでしょうか」という言葉を胸に、戦争で失われた何者にもかえがたい尊い命の為に、その分も生きて、平和のためにいろいろの尽力をつくしていかなければならないと強く思ひました。スコップで掘り進めて行くに連れ、人間のものがどうかは分からなかったが、大小いろいろな骨薬のビンみたいなものや鉄製のもの、また手榴弾も1つ出てきた。

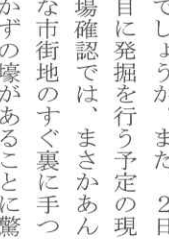
戦を知る旅  
成瀬 裕人



私が沖繩戦について知っていたのは、テレビ等のメディアによるものだけで、自分の中では、当時沖繩で大変なことが起きていたんだという漠然とした認識程度のものでした。今回、このような機会を与えられ沖繩戦についての真実に少しでも近づければと思ひました。初日の戦争体験者の

方々が話された、いつ誰かが死んでもおかしくないという状況というか、周りで人が当たり前のようには死んでいく現場というのは我々の想像を絶する悲惨さだったのではないでしょうか。また、2日目に発掘を行う予定の現場確認では、まさかあんな市街地のすぐ裏に手つかずの壕があることに驚きを隠せませんでした。その入り口付近に大量の骨が投棄されていることに対して、こんなことをして戦没者は慰められないのではないかと、ショックを受けました。実際の発掘では、開始30分程度で人骨らしきものが出てくるという予想が上回るものでした。発掘作業を続けながら、暗い壕を見回したときに、昔いったいここで何が起きたのだろうかという想像をしつつ、きつとこでも非業の死を遂げた人達がたくさんいるのだろうかと思うと言ひ表せない悲しい気持ちに包まれてしまいました。だからこそ、発掘をすることで少しでも戦没者の慰霊になればいいと思ひ作業に集中しました。

ハブの恐怖  
善家健一郎



戦後60年。未だに壕の中には4、500人以上の戦没者が眠るといわれる激戦地・沖繩。今回、31歳にして初めてその地を踏み踏みました。苦手な飛行機により気分がすぐれないまま那覇産業支援センターでの説明会に出席しましたが、国吉さんや高田さんの話を伺い、この3日間は自分にとって貴重な体験になるであろうとの思いを強くしました。

2日目、小雨が降る中、私は探査という役割により糸満市米須のガマに到着しました。はじめに北里隊長から作業方法の説明があり、「よし、やるぞ。」と気合を入れ始めたとき、地元のタクシードライバーによる「ここは、南部で一番ハブの多いところだから気をつけないとダメだぞ。」の言葉にとつてもない恐怖を感じました。電気探査作業は、道なき道を掻き分け1メートル間隔で端子(鉄の棒)を打ちつけ、端子に電流を流し電気の通り具合で穴の位置を特定する方法です。私は端子を打ちつける役となり意を決してミニジャングルに身を投げ出しました。へつぱり腰で右手に持った木の棒を振り回し、前後左右の草を叩きハブを寄せ付け

た責務ではないでしょう  
か。本当に貴重な体験を  
させて頂き有難うござい  
ました。

「出るなら出る。人間の方が強いに決まってるやろ。」という変な自信が湧いてきて、作業に没頭していききました。ふと冷静に考えると、自分を取り囲んでいるこの木々の茂りは戦後60年の月日により形成されたものであり、改めてその時の長さを実感しました。それと同時に、今もなお自分の立っている下には戦争により命を落とした方々が眠っているかもしれないという現状を目の当たりにし、国の戦没者に対する無責任さに強い憤りを感じました。

今回の体験を通じて改めて戦争の悲惨さを痛感しました。私にも子供がいますが、子や孫の時代に再び戦争が行われないことを願うと共に、憲法9条や教育基本法の改悪を進め「戦争できる国」に向かっている日本の将来を強く悲観しました。このツアーにより貴重な体験ができ、今後の人生における大きなバックボーンが形成されたと感じています。来年も行われるならば参加してみたいと思ひます。ありがとうございました。



体験ツアー最終日 那覇空港にて

には遭遇することなく全員が無事作業を終えました。今回探査したこの壕は厚生労働省が調査するというのですが、我々が命を懸けて収集したデータが存分に活かされることを期待します。国はこれまで行ってきた戦後処理のようなごまかしをやめ真正面から受け止めることが必要だと思ひます。今回の体験を通じて改めて戦争の悲惨さを痛感しました。私にも子供がいますが、子や孫の時代に再び戦争が行われないことを願うと共に、憲法9条や教育基本法の改悪を進め「戦争できる国」に向かっている日本の将来を強く悲観しました。このツアーにより貴重な体験ができ、今後の人生における大きなバックボーンが形成されたと感じています。来年も行われるならば参加してみたいと思ひます。ありがとうございました。